

シュンペーターの経済発展の理論

石橋 一雄

1 はじめに

シュンペーターが1912年に主著「経済発展の理論」を発刊したとき、当時の経済学はミクロ経済学的アプローチの呪文に縛られていた。この時代の経済学者の中で経済発展の問題を積極的に取り扱った人は、マーシャル (A. Marshall) であった。マーシャルの経済学体系の特質は経済の有機的成長過程を解明しようとしたところにある。しかし、彼は経済発展の問題を粗略的に、しかも非体系的に取り扱ったのであった。マーシャルは全体的にみて、古典派経済学の軌道を踏襲していたのであった。唯一の例外はクラーク (J.B. Clark) であった。クラークは単に静態論の理論構造を示すのみならず、さらに静態と動態との厳密な区別を強調した。彼は人々、資本、生産方法、生産組織および需要の五つの条件が一定なる場合の経済の内容をもって、静態的均衡が発生し、この静態的均衡を支配する法則を考察することをもって静態論とした。しかし、現実の経済社会においては、上記の五つの条件のいずれかの変動から生じる均衡の攪乱が存在する。この変動はすべて動態論の対象である。それ故に、経済の静態的均衡状態がこれらの条件の変動によっていかに攪乱され、またいかに新しい均衡状態に推移するか、これを研究対象とするのが動態論の内容である。このようなクラークの考え方は、シュンペーターの動学概念に大きな影響を及ぼすことになった。シュンペーターは初期の論文の中でクラークの業績に高い評価を与えている。

シュンペーターは、1939年に大著「景気循環論」、1942年に著書「資本主義・社会主義・民主主義」をそれぞれ刊行した。彼はこれらの著書の中においても経済発展の理論を詳細に論究している。シュンペーターの経済書はいずれも決して読みやすいとは言えないものである。然しこうした経済書の古典が現実の経済社会が目まぐるしく変化する中で静かに支持され続けたということは、実に驚くべきことといえよう。

シュンペーターのダイナミックな資本主義の経済発展の理論は多くの経済学者によって吟味され、踏襲されている。ハリス (S.E. Harris)、ハンセン (A.H. Hansen)、ハーバラー (G. Haberler)、マーゲッド (A.W. Marget)、チェンバリン (E.H. Chamberlin)、メーソン (E.S. Mason)、シュナイダー (E. Schneider)、スミッシーズ (A. Smithies)、中山伊知郎教授、東畑精一教授、坂本二郎教授、伊達邦春教授、塩野谷祐一教授といった人たちがそれを志向した代表的な人たちである。メルツ (E. März) は著書「シュンペーター」の中において、シュンペーターの経済発展の理論のポイントを以下のような4つの命題¹⁾で要約している。すなわち、(1) 経済発展は内生的な過程である。(2) シュンペーター体系において、企業者活動は中心的な重要な役割をはたす。(3) 均衡の攪乱は企業者の新結合の遂行によって引き起こされ、これが経済発展の本質を構成する。(4) 銀行は特殊な役割をはたす。つまり、銀行は信用創造という形で、生産手段の購入に必要な購買力を企業者に貸与する。

シュンペーターのいう企業者は、不断に旧きものを破壊して新しきものを創造することを担う生産主体である。企業者は、経済発展および経済成長の造物主 (demiurge) である。この企業者は静態経済において純粋な伝統主義者のスタンスで行動する静態的生産者とは全く異なる主体である。シュンペーターのいう企業者は、新しい生産方法の導入、新商品の創造、新市場の発見、新しい供

給源泉の開拓、新組織の形成などの新結合の遂行を担う主体である。新結合の遂行を成功裡におさめた企業者は企業者利潤を獲得する。シュンペーターは企業者利潤を純粹に動態的現象としてみなしていた。生産費と収入の一致が直ちに現われない限り、新結合の遂行に成功した企業者は利潤を持続することができる。かくして、利潤は動態的企業者の一時的な市場独占力の状態からもたらされるものである。

さて、本稿は二様の目的をもって叙述されている。発展過程における企業者と新結合について、シュンペーターの体系に関連させて、できるかぎり正確にかつ忠実に跡づけようとするのがその一つの目的である。これに対して、利子の源泉となる企業者利潤の性質を動態的企業者の新結合や市場独占力の背景のもとで吟味しようとするのがそのもう一つの目的である。

2 経済発展の本質

今日のあらゆる経済成長の理論的分析はハロッド＝ドーマーの分析モデルにその出発点をおいている。このような経済成長理論においては、均衡成長あるいは成長均衡という概念が用いられている。これはシュンペーターに言わせれば、静学の処理範囲に属するものであって、動学の処理範囲に属するものではなかったであろう。すなわち、シュンペーターはモーション次元としての成長の概念に関心をもたなかったのである。彼はこの脈絡について以下のように叙述している。

「ここでは人口の増加や富の増加によって示されるような経済の単なる成長も発展過程とはみなされない。なぜならば、これによって惹き起こされるものは質的に新しい現象ではなく、たとえば自然的与件の変化の場合と同様な適応過程にすぎないからである。」²⁾

この引用文から明らかになるように、シュンペーターは、貯蓄、資本蓄積および労働人口の成長が多かれ少かれ連続的な方法で経済体系の適応と調整によって吸収されるであろうと考えていたのである。シュンペーターの場合、このような過程は循環的流れのモデルについて言及されるものであることを除いて、理論家にとってほとんど興味のないものであった。シュンペーターの関心は、経済生活の循環的流れの特性に対する非連続的变化、および崩壊的变化を明示的に引き起こすモーションの次元にあった。シュンペーターは、正統派の均衡分析がこのような変化を旨く処理することができないであろうと主張した。この点についても、シュンペーター自身に語ってもらうのが一番であろう。

「なぜならば、静態的考察方法はその微分的方法に基づく手段によってはこのような変化の結果を正確に予測することができないばかりでなく、そのような生産革命の発生やそれにとまって現われる現象を明らかにすることができないからである。静態的考察方法はこれらの現象が起こってしまった場合の新しい均衡状態を研究することができるにすぎない。」³⁾

このような挑戦は非連続的な経済変化の定量的側面はもちろんのこと、定性的側面をも定式化しようとするものである。すなわち、解明すべきことは、循環的流れの状態の中で内生的に創出される攪乱と、異なる定性的、定量的特徴をもつ新しい均衡の中で生みだされるその後のトラバース過程から構成されるモーションである。このような環境に参加する人々に要求されることは、正常な状態から離脱するような方法で反応し、行動することである。そこでは特殊なタレントが不可欠なものとなる。その後の経済成功と安定は、少なくとも人々が固定した枠組みの中でおこなわれるルーティン活動を超越した活動をおこなうことができるような能力を兼ね備えることを必要とする。目新しさとそれに対する反応はモーションの基本的要素である。

シュンペーターは、モーションに関する自分の立場をまさに三対の互いに相対応するところの対比によって特徴づけている。

「第一は二つの実体的過程の対比、すなわち一方では循環ないし均衡傾向、他方では循環軌道の

変更ないし経済自身による経済活動の与件の自発的変更である。第二は二つの理論的用具の対比、すなわち静態と動態である。第三は現実にしたがって経済主体の二類型とみなしうる行動の二つの類型の対比、すなわち単なる業主と企業者である。」⁴⁾

これらの三対の互いに相対応するところの対比のうち、後者のものはシュンペーターが「経済発展」(Wirtschaftliche Entwicklung)と呼んだものを特徴づけるものである。したがって、資本主義制モーション分析の焦点は、シュンペーターが狭義かつ形式的な意味での経済発展問題として認識した「革命の発生」にあった。経済発展とは、外生的な与件の変化とは無関係に、内生的に創出される現象である。この脈絡に関して、シュンペーターは次のように立言している。

「われわれの意味する発展というものは、普通の意味での発展の中で、一方では特に『純粹経済的なもの』であり、他方では経済理論の立場から原理的に重要なものであって、実際的にも理論的にも区別しうる特殊な現象であり、それは循環あるいは均衡傾向のような現象のもとで現われるものではなく、外的な力と同じようにそれらの内部に影響を及ぼすものである。それは循環運動とは違って、循環を実現する軌道の変更であり、またある均衡状態に向かう運動過程とは違って、均衡状態の推移である。しかしこのようなすべての変更あるいは推移を指すのではなく、第一に経済から自発的に生まれた変化、第二に非連続的な変化を指すにすぎない。……そしてわれわれの発展理論は、この特殊な現象の存在の認識の中にすでに含まれているものではなく、このような現象およびその随伴現象とその問題に向けられた特殊な考察方法であり、上述のような限定された意味での循環軌道の変動の理論であり、国民経済がある与えられた重心から他の重心へ移る転換の理論(「動態」)であって、循環そのものの理論、変転する均衡の中心に対する経済の不断の適応の理論、したがってまたこれらの変転のもたらす影響の理論(「静態」)とはまったく対立するものである。」⁵⁾

留意すべき点は、経済発展とは経済が自己自身から生みだす経済生活の循環の変動であり、自己自身にゆだねられて外部からの衝撃によって動かされていない国民経済に起こりうるべき変化であるという点である。シュンペーターのいう経済発展とは、静止している振り子が突然ひとりで振動を始めるといった状況のように、経済の内部から変化が起こる動態現象であるといえる。

ところで、シュンペーターに関するかぎり、経済発展の背景は産業生活や商業生活の場面である。かくして、経済分析の焦点は均衡理論における消費者選好の決定要因から生産領域にシフトすることになる。つまり、新しい欲望が生産の側から消費者の側に教え込まれ、したがってイニシアティブは生産の側にあるというふうにおこなわれるのがつねである。経済発展を創出させる中心的位置は生産である。より正確に言えば、資本主義経済の発展を起動させる根本的要因は企業者による新結合の遂行である。新結合の遂行者としての、シュンペーターの企業者概念については後述することにして、なによりもまず、シュンペーターのいう「結合」、「新結合」およびその「遂行」と発展との結びつきを、シュンペーターの的確な文章に即して明らかにしよう。

「生産をするということは、われわれの利用しうるいろいろな物や力を結合することである。生産物および生産方法の変更とは、これらの物や力の結合を変更することである。旧結合から漸次に小さな歩みを通じて連続的な適応によって新結合に到達することができる限りにおいて、たしかに変化または場合によっては成長が存在するであろう。しかし、これは均衡的考察方法の力の及ばない新現象でもなければ、またわれわれの意味する発展でもない。以上の場合とは違って、新結合が非連続的にのみ現われることができ、また事実そのように現われる限り、発展に特有な現象が成立するのである。……以下において生産手段の新結合について語るときには、もっぱらこのような場合のみを意味することにしよう。かくして、われわれの意味する発展の形態と内容は新結合の遂行という定義によって与えられる。」⁶⁾

この引用文の中で、われわれが注意をはらわねばならない点は次の箇所である。それは、たとえ

新結合であって、それが旧結合から小刻みな歩みを通じての連続的な適応によって到達されるものである限り、シュンペーターの意味する発展は起こらないという点である。

これまでの議論から、シュンペーターは発展の要因を新結合の遂行にもとめていたということが明らかにされた。そして、シュンペーターは新結合の遂行として、以下の5つの場合を列挙している⁷⁾。すなわち、(1)新しい財貨の生産、(2)新しい生産方法の導入、(3)新しい販路の開拓、(4)原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得、(5)新しい組織の実現が、これである。以下において、これらの五つの場合の内容を説明してみよう。

新結合の(1)の場合は、消費者の間でまだ知られていない財貨、または新しい品質の財貨の生産を表明する。シュンペーターは、景気循環論の中において、生産物の新機軸 (product innovation) の事例が新結合の標準的な事例として役に立つと力説している。この形態の新機軸は需要の変化を創出することはもちろんのこと、供給条件の変化をもおそらく意味する。つまり、生産工程の新機軸 (process innovation) は新しい財貨を伴ってもたらされることになるであろう。生産物の新機軸は消費財だけとかかわりをもつものと拘子定規に仮定されるべきではない。新しく、改良された生産手段という種々なインプリケーションは見落されるべきではない。この場合、仮に新しい生産手段が有効に需要されるならば、生産工程の新機軸が起こらねばならない。

新結合の(2)の場合は生産工程の新機軸として言及されるものである。シュンペーターはそれを生産方法の導入として指定している。すなわち、新結合の(2)の場合は、当該産業部門において実際上未知な生産方法の導入、これは決して科学的に新しい発見にもとづく必要はなく、また商品の商業的な取り扱いに関する新しい方法を含んでいる。この新しい生産方法というタームの中には、シュンペーターは相当の範囲の可能性を含めている。この可能性の中には、原材料や商品の取り扱いに関する新しい方法や、作業のテーラー組織化、さらに商品の生産についての技術上の変化などが含まれている。不幸にも、厳密な意味での生産工程の新機軸に関して、シュンペーターは、新機軸を遂行するのに際して必要とされる投入量の変化に関する動学にもとづいて新機軸を分類するという問題を考察しなかったのである。この点で、現代の新古典派の人々は、技術進歩が行なわれるときの生産量と生産要素、および生産要素相互間の関係に注目している。ヒックスは、技術進歩を労働の限界生産力の資本の限界生産力に対する比率で分類する。ヒックスの場合、労働の限界生産力の資本の限界生産力に対する比率が不変であるとすれば、そこにおこなわれる技術進歩は中立的である。また、労働の限界生産力の資本の限界生産力に対する比率が増大(減少)すれば、そこにおこなわれる技術進歩は資本節約的(資本利用的)技術進歩である。新しいプロセスが、より多くの、あるいはより少ない労働力の投入、または生産された生産手段を相対的に要求するか否かは、そこにかかるトラバスに大きな影響を及ぼす。これはシュンペーターの分析における空隙である。

新結合の(3)の場合は新しい販路の開拓である。これは当該国の当該産業部門が従来参加していなかった市場の開拓である。この新結合の(3)は企業者の需要サイドに影響を及ぼす。そこには、供給サイドの効果もあるであろう。なぜならば、新市場で売却されるべき商品はどこかで、おそらく、既存の商品の生産拡大によって造出されねばならないからである。しかしながら、このような新機軸は新結合(1)、(2)の場合にみられるよりも低順位のタレントと技術の行動を必要とするように思われる。新市場に参入することや既存の生産を拡大することは固定した枠組みの中でおこなわれるルーティン活動にもとづく主体の行動に近い行動である。このことはシュンペーターが定義した循環的流れの攪乱を引き起こすということはあるにすぎない。適応的反応だけを必要とするのは成長に類似したものである。

新結合の(4)の場合は、原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得である。この場合には、この供給源が既存のものであるか、あるいははじめてつくり出されねばならないかは問わない。ここでも、

企業者タレントに関する要求は新結合の(1)と(2)の場合にみられるのと同じ順位付けではない。特に供給源がすでに存在しているところでは、低順位の管理者は固定した枠組みの中でおこなわれるルーティン活動の行動の中において供給源を利用することになる。新結合(3)と(4)の場合は、ともに開放経済の考察とかかわりをもっている。なぜならば、新しい市場や新供給源は外国、または植民地の中で見い出されるからである。議論を単純化するために、シュンペーターはかれの理論的分析を排他的に封鎖経済に限定したのであった。

新結合の(5)の場合は新しい組織の実現である。これは独占的地位(例えばトラスト化による)の形成あるいは独占の打破を表す。シュンペーターは、景気循環論の中において、新事業組織の設立(例えば専門店とは違った百貨店のようなもの)の考え方を主張している。ところで、あらゆる新結合の一般的な理念は競争相手よりも企業者に有効で、しかも一時的な独占利益をもたらすことになる。この類型の新結合のもとでは、シュンペーターは、一産業競争の性質に多かれ少かれ恒久的な変化があらわれることを示唆している。このことは他の場合と比較して、長期的な時間的視野が勘案されることを表すことになる。さらに、上述された百貨店の例は適切なものとはいえない。なぜならば、それは生産工程という組織的形態を現実において構成しているからである。また百貨店が個々の主体によって導入されると、それは新結合の(2)の場合に属することになる。かくして、ここで言及されたような市場構造の広範な変化をもたらすものは理念の模倣と拡散であるということになるであろう。

シュンペーターの経済発展の骨組みは、対象として新結合であり、主体として企業者であり、また手段として信用創造である。これまでの議論をとおして新結合の輪郭が明らかにされたので、順次、新結合を遂行する企業者について叙述することにする。

問題となる新結合の遂行者は、先見性と独創性に富み、決断力と実行力といった能力を兼ね備えた英雄的企業者である。このように新結合は企業者精神という特殊なタレントをもつ一群の人々によって遂行される。経済発展の根本的現象を表明するものは企業者の事業である。静態経済のもとでは、このようなタレントを発揮する必要もないし、余地もない。かかる循環的流れのもとでの経済活動はすべて反復的なものであり、固定した枠組みの中でおこなわれるルーティン活動である。体系内のすべての企業は、平均生産費曲線と限界生産費曲線との交点に価格がおちつく完全競争的均衡状態にあり、その収入は費用(賃金と地代に分解される)にちょうど等しくなる。このように、循環的流れにおいては企業者は利潤を得なければ損失も蒙らないのである。この結果として、企業者はそこではなんら特殊な機能をもたないということになる。換言すれば、循環的流れのもとで旧来の循環軌道を変えなく経常的に生産活動を営んでいる生産者は、「企業者」ではなく、それは単に「業主」とよばれる存在にすぎない。

企業者は諸発明(仮にそれが上述の新結合のための基礎を提供するならば、このタームは広い定義を必要とする)を把握し、循環的流れの世界において、「新結合」を通じて発明に経済的意義を与えていく。シュンペーターの見解にしたがえば、企業者は新しい企業を設立することによって新結合の遂行をおこなう。この過程が経済発展に非連続性を注入することになる。なぜならば、一人の企業者が技術革新を遂行し、首尾よく成功すると、模倣者たちが現われ、次第にその数が増大し、企業者の群生的出現が起こり、その後、新結合の衰退とともに消滅していくからである。

シュンペーターの企業者概念は機能的概念であって、実体的概念ではないとされる⁸⁾。この解釈は正しい。したがって、この解釈にして正しいとすれば、なんびとたりとも、例の新結合を遂行する限りにおいて、企業者たりうるということになるわけである。それ故に、シュンペーターの見解に従えば、上述のようなタレントをもっているものは企業者として成功し、結果的に資本家になるものとするものであり、逆もまた真であるが、それはむしろ本質的なものではないとする。シュンペ

ーターはこれまでの脈絡に関して、次のように立言している。

「企業者であることは職業ではなく、通常一般には永続する状態ではないから、企業者はもちろん研究者が分類上つくる集団という意味では一つの階級であるが——彼らはたしかに特殊な種類の経済主体であるが、同一個人につねに特有な種類のものではない——しかし、「階級構成」とか、「階級闘争」とかに関連して考えられる社会現象の意味での階級ではない。企業者機能の履行は、成功した企業者およびその一族に対して階級的地位をつくり上げ、その時代に刻印を残し、生活様式や道徳的、審美的価値体系を形成することができるが、しかしそれはそれ自体としてなんらかの階級的地位を意味するものでもなければ、これを前提とするものでもない。そして獲得された階級的地位はそれ自体としては企業者としての地位ではなくて、むしろ成功した場合にえられる私経済的成果の使い方に応じて、領主的地位とか資本家的地位として特徴づけられるのである。その場合、このような成果と資質は相続しうるものであるから、この地位は長期にわたって超個人的に維持され、その子孫がさらに企業を営むことが容易になるということもあるが、しかし企業者の機能がただちに継承されるわけではない。このことは社会闘争の掲げるスローガンとは反対に、実業家の家族の歴史があますところなく示しているところである。」⁹⁾

これ以上、われわれの冗語をつけ加える必要はないであろう。新結合を遂行する限りにおいて、なんびとも企業者たりうるという概念規定それ自体に誤りはないにしても、新結合を遂行しようとして、旧来の循環軌道から脱出するためには、未踏のジャングルを切り開き、新しい道をつける能力、決断力と実行力といった資質がその担当者に要請されねばならないはずである。したがって、これらの資質や能力を兼ね備えた人は、どの時点をとってみても、国民の中のごく少数の人に限られている。

ところで、企業者が新結合の遂行をおこなうさい、一つの問題が発生する。それは、新しい企業操業にかんする資源がどこから調達されるのかということに関連する問題である¹⁰⁾。循環的流れのもとでは、あらゆる資源は完全雇用のもとにおかれている。競争市場によってこのことが可能になる。自動調整の性質をもったこの経済体系の中に、新結合（新機軸）が押し入ってくる。従って、新結合の遂行が循環的流れの均衡を攪乱することになり、このためには上述の企業者が資源市場に買手として参入することになるであろう。この点がシュンペーターの経済発展分析の要である。企業者は需要関数をシフトさせ、資源の市場価格が変化する。この結果として、不均衡状態が発生する。シュンペーターが想定した自由競争市場のもとで、価格調整の過程および資源の再配分の過程が遂行される。シュンペーターの議論は、かかる調整が均衡を回復させるだろうと、いうことである。

ところで、自由競争経済においては、新結合は旧結合を攻略することによって遂行される。この脈絡にかんして、シュンペーターは以下のように立言している。

「一般に新結合は必要とする生産手段をなんらかの旧結合から奪い取ってこななければならない。」¹¹⁾

「原則としてけっして、利用されていない生産手段を結合しておこなわれると考えてはならない。」¹²⁾

このように、シュンペーターは、新結合の遂行が、原則としては利用されていない生産手段——例えば失業労働者群の存在のごとき——を利用して行なわれると考えてはならないと主張する。確かに、シュンペーターの場合、失業労働者群の存在の可能性を考えていないわけではなく、しかもこのような存在が、新結合の遂行を促進させる事情になったり、また、そのための好条件になったり、あるいはまた、その動機にすらなることも否認してはいないのである。しかし、シュンペーターの論調からすれば、大量の失業は世界史的事件——世界戦争——の結果、それともシュンペーター

一の意味での発展の結果とみるべきであろう。要するに、シュンペーターは、あくまでも、均衡のとれた正常な循環から出発して経済発展を説明しようとしたのである。したがって、新結合の遂行が国民経済における生産手段ストックの転用を意味する。

ところで、新結合のための生産手段の引き抜き転用は、社会主義計画経済においては、計画に基づく命令によって行なわれるが、資本主義経済においては、これは銀行による信用創造という形でおこなわれる。この脈絡に関して、シュンペーター自身に語らせるのが一番であろう。

「新結合を遂行しようとするものは、貨幣あるいは貨幣代替物についての信用を求め、これによって必要な生産手段を購入しなければならない。このような信用を供与することは明らかに「資本家」と呼ばれる範疇の経済主体の機能である。また、これは明らかに経済を新しい軌道に押しやり、その生産手段を新しい目標に奉仕させるための「資本主義的」経済形態に特有な方法である。」¹³⁾

このように、新結合の遂行者による生産手段の転用が行なわれていくと、貨幣現象面から好況局面を特徴づける一連の諸現象が生起する。第一に必要な生産手段を奪い取るための資金は銀行による信用創造という形でおこなわれる。順次、この信用の増大は生産手段の価格の上昇をもたらす。なぜならば、新結合の遂行にとって必要とされる生産手段が転用という形で入手されるものとなれば、当然、新結合の遂行者は旧結合で支払われているよりもより高い価格を支払うことになるからである。この結果として、生産手段の所有者の所得は増大することになる。これに伴って、消費財需要の増大が惹起される。これは消費財の価格の騰貴をひきおこす。また価格上昇の効果は、いわゆる「強制貯蓄」の現象をひきおこすであろう。人々は、高い価格を通じて同一額の所得に対して今までよりも少ない消費を行うことをしいられ、消費の節約をしいられることになる。こうして貯蓄が社会全体として、いわば強制的に生み出されることになる。

さらに、シュンペーターは「発展理論」において、「生産手段の転用は発展の形態と内容の第二の定義を与える」と明言している。この章句は何を意味するのか。これは、通例の資本形成の理論に含まれている純粋経済的発展理論（これは貯蓄や利用可能な労働量の増加が経済発展の原動力であるとみなす理論である）に対するシュンペーターの見解の一端を表明しているといつてよいであろう。しかし、この議論は誤りではないが、本質的なことがらを看過している。つまり、一国の生産手段のストックの増加や欲望の増大は数世紀にわたる経済史の経過の説明にとって重要なことではあるが、発展の機構にとっては、これらは生産手段の転用の背後にまったく隠されてしまう。もちろん、この議論はシュンペーターの見解であるが、彼はこの後、この論議をこう結んでいる。

「たとえば、過去五十年間の世界経済の外貌を変化させたものは、貯蓄や利用可能な労働量の増加そのものではなくて、その転用にはかならなかったのである。とくに人口の増加や、さらに貯蓄を生む収益源泉の増加の大部分は、そのときどきに存在する生産手段の転用によってそもそも始めて可能になった。」¹⁴⁾

ところで、新結合の達成のためには、企業者は生産手段を自分の手許に準備しなければならない。しかし、新結合に必要な生産手段の購入に用いられる金額は、かりに当該経済主体がたまたまこれを所有していないとすれば、どこからくるのだろうか。この問いに対して、貯蓄からというのが伝統的な答えであった。つまり、新結合に必要な生産手段の購入に用いられる金額は、国民経済の貯蓄の年々の増加およびその年々の解放される部分からくるというのがその答えである。しかし、シュンペーターはこのように貯蓄から出発することは許されないと考える。彼はこの理由について次のように述べている。

「なぜならば、その額はすでに進行している発展の私経済的結果からのみ説明されるものだからである。そのほとんど大部分は、本来の意味における貯蓄活動から生じたものではなく、すなわち一般に年々自由に処分しうる消費基金とみなされる収入のうちの非消費部分から生じたものではな

く、積立金から、すなわちわれわれが企業者利潤の本質をその中に見い出そうとする新結合の遂行の結果から生じたものである。」¹⁵⁾

では、新結合の遂行に必要な生産手段の購入に用いられる金額はどこから得られるのであろうかという問いに対して、シュンペーター自身の答えを聞くことにしよう。

「問題となることは、すでに従来からだれかの手もとに存在していた購買力を移転することではなく、無から新しいものを創造し、これが従来から存在する流通に参加することである。新しい購買力を創造するための信用契約が、それ自身流通手段ではないなんらかの実体的担保に基づく場合にも、同じように無から創造されるといわなければならない。そしてまさにこれこそ新結合の遂行のための典型的な金融の源泉であり、しかも過去の発展の結果が事実上いかなる場合にも存在しないときには、ほとんど唯一の金融源泉となるのである。」¹⁶⁾

申すまでもなく、循環の流れにおいては、一方では貯蓄しうるほどの豊かな源泉もないし、他方では本質的にそうする誘因も存在しないであろう。循環におけるすべての貨幣は一定の軌道に固く結びつけられていて、その軌道の上を単純に流通しているのみで、その流れを離れて貯蓄に向けられる余裕はない。このことは、循環の流れの状況には新結合の金融への源泉が求められないことを意味する。そこで経済発展を実現する新結合の金融の源泉は、まさに銀行による貨幣創造、すなわち信用創造に求められるといわなければならない。かくして、銀行による貨幣創造こそは企業者にとって新結合の遂行を達成するための典型的な金融の源泉であるということになるのである。ここで留意すべき二つの点がある。その一つは、シュンペーター理論における主役はいうまでもなく企業者による新機軸の遂行であるという点である。もう一つの点は、企業者による新機軸の遂行を補助するワキ役が銀行による信用創造であるという点に関してである。

3 シュンペーターの企業者概念

企業者概念の問題は18世紀のカンテイヨンの時代から、現代までたくさんの人々によって議論されてきた。カンテイオンは企業者なる用語を用いた最初の人であった¹⁷⁾。セイ(J.B. Say)はカンテイヨンの伝統に沿って、企業者——それ自体として、また資本家とは明らかに異っているものとして——に対して、経済体系の図式における独自の地位を割り当てた最初の人であった。セイは企業者を生産諸要素を組み合わせる生産をおこなう人であると定義した。

古典派の時代においては、資本を蓄積することが経済発展の主要な課題であった。つまり、総生産額から地代と総賃金とを差し引いた差が利潤として残り、それが蓄積を引き起こし、これが賃金をせりあげる。賃金が高くなるために、人口は増大する。すると、またそこでは、正の利潤が発生し、再び蓄積が始まる。リカードにおいては、一国の年生産は資本蓄積とともに増大し、資本蓄積は利潤率が正であるかぎり続けられるものと考えられた。したがって、利潤率が零になることは、資本蓄積が零になり、一国の年生産が年々同一規模に止まることを意味している。このような年々同一規模の生産が繰り返される状態をリカードは、静止的状态と呼んでいる。それは経済発展の最終的到達点を示している。このような叙述から明らかになることは、リカードが企業者概念に全く注目しなかったということである。しかし古典派でも、ジョン・スチュアート・ミルにいたっては企業者に注意が注がれるようになり、これまでの無自覚的な企業者という用語に内容が盛り込まれるようになった。ミルは、企業者の機能を分析し、企業者を、監督し、統制し、さらに方向の指示を決定する役割を担う主体としてみなした。

さらに、均衡分析を初めて確立したワルラスも、大著「純粹経済学要論」において、企業者について論及している。

「企業者は、原料を他の企業者から購入し、地代を支払って土地所有主から土地を賃借し、労賃

を支払って労働者の人的能力を賃借し、利子を支払って資本家の資本を賃借し、最後に生産用役を原料に適用し、得られる生産物を自分の計算で販売するところの人（個人または会社）である。」¹⁸⁾

イギリスの経済学者たちは企業者と資本家を同一視していた。この点、ワルラスは、企業者と広義の資本家（土地所有主、労働者、資本家）たちが常に対称的な関係にあるとみなしている。このことは、ワルラスの企業者概念が企業者と資本家とを同一視するイギリスの経済学者たちのそれよりも卓越したものであることを意味する。さらに上述のワルラスの定義から明らかにされるように、ここでの企業者は、絶えず極大利潤の追求を達成するという欲求に基づいて生産用役市場で生産諸用役を調達する購買者であり、または生産物市場で生産物を供給する販売者である。さらに、「生産の均衡状態においては、企業者は利潤も得なければ損失も受けない」とワルラスは主張する。かくして、ワルラスによってはじめて企業者概念が明確化されたといえる。

ケインズの師ともいべきマーシャルは、古典派以来の供給側面を理論分析の中核としながら、企業者を産業社会の指導者として位置づけた。マーシャルは、主著「経済学原理」において企業者を次のように特徴づけている。

「現代世界の実業の大部分では、与えられた努力が最も有効に人間の欲望を充足するように生産を指導する役割は分割されて、使用者の専門的な集団、あるいは一般に使われている用語でいうと、実業家の集団の手にゆだねられている。かれらは事業の危険を敢行しないしは引き受ける。かれらは仕事に必要な資本と労働力を結合させ、その一般的な計画をととのえないしは製作し、その細かい細部に対しては監督を加える。実業家はある意味では高度な技能をもった職階に属するものともみられるし、他の意味では肉体労働者と消費者との間に介在する仲介人だともいえよう。」¹⁹⁾

ここでの「仲介人」という用語は飽くまでも比喩的な表現である。マーシャルは、一方では企業内においては生産諸要素を需要に適合した商品に結実すべく組織化する役割を担う主体として企業者を描き、また一方では市場的取引を経由しながらいろいろな商品を最終消費者に送り届ける役割を担う主体として企業者を素描している。上述の引用文の中で注意を払うべき点は、「危険を引き受ける」という箇所である。これは企業者（entrepreneur、undertaker、Unternehmer）の語源であるが、マーシャルの経済学原理において一般的に想定されている企業者であるところの資本家的企業者の性格を如実に反映している。さまざまな役割を分担し合う企業組織内において、企業者自身が責任をもって担う業務はこの危険負担と密接に結びついているのである。企業者がその危険を負担しうるのは、投下された資本が彼のものだからである²⁰⁾。

これまでの論及された企業者概念の理論的分析で明らかになることは、多くの経済学者たちが人間を平均的水準を凌駕した非凡な素質をもった経済主体としてではなく、平凡な経済主体として、経済学に参加させてきたという点で共通のものがみられる。この意味で、過去の経済学者たちは、平均的水準を凌駕する非凡な素質をもった企業者の姿を完全に排除するという不可能な芸をやったといえる。

さて、経済発展の中心現象は、企業者、新結合の遂行、銀行による信用創造の三者である。この点に注目して資本主義経済の発展モデルを理論的に構築したのがシュンペーターである。換言すれば、従来どおりのことを決まったやり方で行う平均的な経済主体を排除し、慣行の軌道を変革し、新しいことを実現しようとする天才的な経済主体、すなわち動態的企業者を経済発展の担い手とし、しかもこれを理論の中核に位置づけて、資本主義経済の動態理論を形成しようとしたのがシュンペーターである。さっそく、シュンペーター自身に企業者の特徴を語ってもらうことにしよう。

「われわれが企業（Unternehmung）と呼ぶものは、新結合の遂行およびそれを経営体などに具体化したものことであり、企業者（Unternehmer）と呼ぶものは、新結合の遂行をみずからの機能とし、その遂行にあたって能動的要素となるような経済主体のことである。」²¹⁾

すでに明らかにされているように、企業者の新結合を基軸として、経済発展は可能になる。資本主義を特徴づけるものは、経済内部において生じる非連続的な自律的変動としての経済発展であるから、企業者はそこでの主役を演ずることになる。換言すれば、シュンペーターの企業者概念は、経済発展に直接的に密接不可分に結びついた概念と言える。いわば、「企業者なくしては、経済発展なし」という議論である。つまり、過去の経済学者たちは、企業者の姿を完全に排除するという不可能な芸をやってのけるということに専念してきた²²⁾。これに対して、これまでの経済理論において想定されていた企業者活動の中から、経済発展に関わるものだけを抽出し擬人化したものがシュンペーターの企業者概念である。したがって、循環的流れの静態経済における企業者は、「単なる業主」として企業者の範疇から排除される。シュンペーターにとって、企業者として何の才能もなく、今までの経験と予見しうる動機の周辺でのみ機能し、一定の与件の下での利潤極大化の原則に従って行動する生産主体は、通常の軌道にしがみつき創意工夫を凝らさない平凡なる主体としか映らないのである。循環的流れのもとにおいては企業者は利潤も得なければ損失も蒙らないのである。すなわち、彼はそこではなんら特殊な機能をもたず、彼は企業者としては存在しないのであって、それ故にわれわれはこのような経営管理者に対しては企業者という言葉を使わないのである。このように、シュンペーターは、循環的流れにおいて「単なる業主」の概念を用い、経済発展において「企業者」の概念を採用し、行動主体の対立を試みている。このようなシュンペーターの概念規定は、彼の分析目標である資本主義経済の動態メカニズムの真の姿を描写するということに起因するものと思われる。なぜならば、シュンペーターは資本主義経済過程を本質的に動的であるとみなし、静態的な資本主義は存在しえないと考えていたからである。したがって、資本主義の経済分析は、どこまでも動態要因に関する分析であらねばならず、そこでの主役を演ずるのは企業者であるからして、資本主義経済の動態メカニズムの担い手として動的企業者を登場させたのは当然のことであると言える。

そこで以上の点をもとに、以下においてシュンペーターの企業者について、その内容をより明確にしてゆきたいと考える。

第一に、企業者と資本家との間に区別が設けられねばならない。資本家とは貨幣所有者、または、銀行に対して払戻し請求権をもつ主体である。企業者とは、新結合の遂行をおこなう生産主体である。この企業者は発展過程において自己資本なしでも間接金融によっても新結合を遂行することが可能である。発展過程において、才能のあるものは「借金に乗って成功する」と言われる。このことは、企業者が資本所有の問題から解放されていることを表明する。そして、企業者から資本家的要素を分離することができるのは、必要な購買力を貸与してくれる銀行の存在と彼独自の資本概念の規定に依拠するものである。

さて、企業者が資本所有者である必要はないとするシュンペーターの想定に対して、いくつかの問題が提起される。ひとつは経済的分野から提起される問題であり、他のひとつは経営的分野から提起される問題である²³⁾。前者から素描しよう。真の資本家は銀行である。なぜならば、すべての積立金や貯蓄は銀行のもとに流れ込むからである。この銀行は企業者が実現するであろう将来の生産物を唯一の手掛かりとして、かれらに購買力を貸与する。しかし、企業者の新結合は、つねに成功して、利潤を獲得するとはかぎらない。失敗してしまう危険も十分に存在するわけである。この危険負担は貨幣貸与者である銀行が引き受ける。要するに、シュンペーターの見解は、企業者が決して危険の負担者ではないということである。危険を引き受けることはいかなる場合にも企業者機能の要素ではない。企業者は自分の名声を危険にさらすかもしれないが、失敗の直接の経済的な責任は彼にかかるのではない。むしろ、事が失敗に終わるならば、災難に合うのは信用供与者である。また企業者が以前の企業者利潤から自己金融をするか、あるいは彼が彼の「静態的」経営に属する

生産手段を用いるにしても、危険は企業者としての彼にかかるのではなく、資本家としての彼に、あるいは財貨所有者としての彼にかかるのである。かくして、シュンペーターは、企業者から資本所有の問題を分離することによって、危険負担者としての側面を排除しようとしていたのであろう。

順次、経営的分野から提起される問題を素描しよう。「企業家とは、変化を探し、変化に対応し、変化を機会として利用する者である」²⁴⁾。この章句はドラッカー (P.F. Drucker) が大著「イノベーションと企業家精神」の中で明らかにした叙述である。このように、経営学的分野においてシュンペーターのいう「企業家精神」が重要視されている。ここで留意すべきことは、企業者の儉約である。すなわち、現在の消費を待忍することで内部資金の充実をはかり、これを企業設立の基盤とすることである。このような内部資金の充実は生産活動の開始にさいしてある程度の効果をもつことは確かであろう。しかし、企業者が新結合の遂行をおこなうという状況は異質のものであろう。なぜならば、いままでの慣行軌道を根本から破壊し、新しい軌道をつくり出す場合には巨額の資金調達が要求され、それをすべて自己金融で賄うことは不可能だからである。したがって、企業者を動態的企業者としてみなす場合には、儉約はあまり意義のあることではないであろう。

論議を次に移そう。第二に、企業者は、創意、権威、先見の明、指導といった資質、能力を備えた動態的企業者であらねばならない。つまり、企業者は、恰も静態的地位にあるかの如く行動すると想定することができず、単位費用曲線を低めようと努力したり、また生産性が低く成果の乏しい分野から、生産性が高く成果の大きな分野へ資源を動かしたりすることを任務としている。

第三に、企業者は、単純化した粗雑な心理法則にもとづいて行動するよりも、もっと複雑な動機をもつ人間である。つまり、企業者は次のような五つの動機をもっている。(i) 貨幣的報酬を獲得する動機、(ii) 仲間達の間での名声、個人的虚栄心の満足、(iii) 権力への欲求、(iv) 安全を求める動機、(v) 独占への動機、などがこれである²⁵⁾。

ところで、企業者を新結合の遂行をもたらす経済主体とみなすことは、循環的流れにおける単なる業主とは異なる別種の能力を企業者に付与することを意味する。なぜならば新結合は何らかの意味で非凡な資質をもった者によって成就される性格のものだからである。ではなぜこのような資質が要請されるのであろうか。その回答は、既にこれまで展開されてきた議論からも、その全貌の一半が明らかにされているといえる。つまり新結合が非連続的に出現する状況、それに随伴する諸現象をもう少し探求してみればよいわけである。この点について、シュンペーター自身に語ってもらうのが一番であろう。

「慣行の軌道では通常の経済主体には彼自身の知識と経験だけで十分であるが、新しい事態に対しては指導が必要となってくる。彼はすみずみまで十分に分かっている循環の中では潮流にしたがって泳ぐが、彼がその軌道を変更しようとするときには、潮流に逆って泳ぐことになる。以前は支柱であったものが、いまや障害となる。熟知していた与件がいまや未知のものとなる」²⁶⁾

「……慣行の領域の外に出ることはつねに困難をとめない、新しい要因を含むものであって、このような要因を内包し、このような要因をその本質とする現象こそまさに指導者活動にほかならないのである。これらの困難の性質は次の三つの点によって表すことができる。第一に、経済主体が慣行軌道の外に出ると、軌道の中では多くの場合非常に正確に知られていた、決断のための与件や行動のための規則がなくなってしまうのである。もちろん、この場合にも経済主体が経験の世界から、あるいは社会的経験の世界から飛び出してしまうわけではない。……けれども事態の中にはその性質上不確実なものもあろうし、また漠然とした範囲においてしか確定できないものもあろうし、またおそらくは単に「推測」できるにすぎないものもあろう。経済主体の行動によって変更された与件や、それによって始めて作り出される与件についてはとくにそうである。……第二の点は経済主体自身の態度に関するものである。新しいことをおこなうのは、慣行的なものや試験ずみのこと

をおこなうよりも単に实际的に困難であり、趣を異にしているだけではなく、さらに経済主体は新しいことに反対し、たとえ実際上の困難が存在しない場合にもなお、これに反対するのである。これはあらゆる領域においてそうである。……経済活動の世界においても同様である。新しいことをおこなおうとする人の胸中においてすら、慣行軌道の諸要素が浮び上がり、成立しつつある計画に反対する証拠を並べ立てるのである。意志を新しく働かし、その方向を変えることが……必要となる。……第三の点は、一般にあるいはとくに経済面で新しいことをおこなうとする人々に対して向けられる社会環境の抵抗である。……この抵抗を克服することは、つねに、生活の慣行軌道には存在しない特別な種類の課題であり、また特別な種類の行動を必要とする課題でもある。経済問題の場合には、この抵抗は、まず新しいものによって脅かされる集団から始められ、次に一般世人の側から必要な協力をうることの困難の中に現われ、最後に消費者を惹きつけることの困難の中に現われる。……これらを最もよく研究することができるのは資本主義の初期段階についてである。」²⁷⁾

これ以上、われわれの冗舌をつけ加える必要はないであろう。新結合を遂行しようとして、流れに逆らって泳ぐためには、あるいは、新結合の遂行にあたって当面する上述の諸困難を克服するためには、先見の明と独創性に富み、決断力、実行力、権威、指導といった資質あるいは能力がその担当者に要請されなければならないはずである。したがって、これらのたぐいまれな才能や資質を備え得た人は、どの時点についてみても、国民の中のごく少数者に限られていることになる。

新結合の遂行は、最初のうちはきわめて困難であるから、少数の恵まれた能力をもったひとびとだけ可能なのである。少数者の一人が上述した諸困難を見事に乗り越えて成功をおさめて多額の利潤を稼得する場合に、次々にこれに追随する模倣者たちが出現する。この模倣者たちは、初めは少数であると考えられるが、時間が経過するにつれて次第に多くの模倣者が追随してくる。これが企業者の群生的出現²⁸⁾と呼ばれる現象である。最初の一人の新結合の遂行者にとっては、その実現は未踏のジャングルを切り開き、新しい軌道を確立しなければならないために、幾多の困難をきわめたものではあっても、ひとたび一人の企業者によって、新結合が成功裡に実現されたとなると、多くの他の模倣者の出現を容易にする環境がそこには作りだされることになる。かくして、企業者の群生的出現という結果が招来されることになる。

ところで、シュンペーターの意味での企業者はいかなる動機で、新結合の遂行にあたって当面する諸困難にあえて取り組もうとするのであろうか。この問題は企業者の行動に関する動機の型の問題である。シュンペーターは動機の型については、快樂主義と非快樂主義との比較対比を試みている²⁹⁾。快樂主義とは、一定の制約条件の中で行為のもたらす効用と不効用の差引計算を行為の基準とするものであって、循環的流れにおける静態経済はこのような行動様式によって特徴づけられる。この脈絡に関して、シュンペーターは次のように立言している。

「観察者から見れば、経済行為の根本的意味、すなわちなぜ経済行為一般が存在するかを説明する意味は、循環において現われている。この意味においては、経済的動機の内容としての財貨獲得はもちろん欲望充足のための財貨獲得にほかならない。」³⁰⁾

この引用文から明らかになるように、静態経済における経済主体の経済行為の動機は、欲望充足のための財貨の獲得にあるといえよう。すなわち循環的流れにおいては、欲望の充足はあらゆる経済主体がおこなうとするものを支配する。つまり、「欲望のないところに経済行為なし」という意味で、欲望の充足は経済行為の目的である。しかし、この動機は企業者の特別な行動を説明することができない。シュンペーターは、物質主義者 (materialist) たちの基盤には直接に存在しないいくつかの動機を見い出そうとした³¹⁾。シュンペーターの見解は、ゴッセンの法則の作用が企業者の指導者活動の下では役に立たないものであろうというものであった。要するに、シュンペーターが引き出した有力な帰結は快樂主義以上のものが問題とならねばならないであろうということであった。

なぜならば、企業者は効用と不効用の計算にもとづいてかれらの努力に匙加減することはありえないからである。企業者は効用の極大をもたらすに必要とされる余暇を支持してかれらの経済活動を切り詰めるように努力するとは思われない。かくして、シュンペーターは快樂主義の見地から以下のような帰結を引き出した。

「欲望満足が経済活動の基準であるならば、われわれの種類の行動は一般に非合理的であるか、さもなければ異なった種類の合理主義に属するものであろう。」³²⁾

かくして、シュンペーターの見解に従えば、企業者の行動は非快樂主義ということになるのである。勿論、彼は経済発展の世界における企業者の動機が快樂主義とは全く無縁のものであることをきっぱりと断言している。

「典型的な企業者というものは、自分の引き受ける努力が十分な享樂剰余を約束するかどうかを問うものではない。彼は自分の行動の快樂的成果を気にかけない。彼は他に為すべきことを知らないために、たえまなく創造をする。彼は獲得したものを享樂して喜ぶために生活しているのではない。」³³⁾

要するに、動態は非快樂主義の行動様式によって特徴づけられる。そこで、シュンペーターは、企業者に全精神を傾けて新結合を駆りたてる動機を、次のようなものに求めている。それは、第一に、私的帝国を建設しようとする夢想ならびに意思であり、第二に、勝利者意志すなわち闘争の意欲、成功そのものための成功獲得意欲であり、第三に、創造すること、実現すること、あるいは能力を発揮することの満足である。

4 企業者利潤

「企業者利潤は費用超過額である。まず企業者の立場から考察しよう。多くの一連の経済学者がすでにわれわれに語っているように、企業者利潤は事業経営における収入と支出との間の差額である。この定義は表面的ではあるが、出発点としてはこれで十分である。ここで支出とは、企業者が生産のために直接あるいは間接に費すすべての費用である。この場合、企業者の固有の労働用役に対する適当な賃金、彼に属する土地に対する適当な地代、最後に危険プレミアムもこれに加算すべきことを忘れてはならない。」³⁴⁾

この章句は、シュンペーターが大著「経済発展の理論」の第四章の冒頭で示した叙述である。ここでのシュンペーターの主要な論点は次のような点を明らかにしようとしたことにある。すなわち、企業者所得の利潤因子は企業者が市場条件のもとで新結合の遂行にさいして引き起こされる労働に対して要求される賃金と企業者が所有している土地に対する市場地代をそれと区別することによって、それだけを切り離して考えるようにはっきりさせるべきであるということ、これである。既に明らかにされたように、危険プレミアムは企業者に発生するものではない。なぜならば、この経済主体は役割上、リスクを引き受けないからである。しかし、企業者が新企業、あるいは新設備を建設するのに必要とされる手許資金を個人的に提供するならば、企業者は資本家であり、このような報酬はある程度まで企業者によって要求されることになる。さもなければ、危険プレミアムは企業者の利子負担の一因子として信用の提供者に発生すべきものであろう。これらの後者の所得の項目が支出としてみなされるか否かは、定義の問題である。しかし、われわれが今までなしてきたことは以下のようなことである。すなわち、企業者が新結合でおこなった後に生じる収入の流れは、少なくとも不明確な生産費用（つまり、企業者の賃金や地代の請求、借入金に関する利子費用（これには、危険プレミアム、企業者自身が供与した金融資本に関する内部利子費用などが含まれる）を償わねばならないということ、これである。したがって、企業者利潤とは、シュンペーターが超過額 (surplus) として言及した残差物であるということになる。

問題の生産費の性質に関する議論は暫く協道におくことによって、超過額の源泉の説明について、シュンペーターの考え方を述べることにしよう。

「われわれの解答は簡単にいい表すことができる。すなわち、循環においては経営の総収入は——独占利潤を別として——支払われた支出をちょうど償うに足るだけの大きさである。そこには利潤もえず、損失も蒙らない生産者が存在するにすぎず、彼らの所得は経営の賃金という言葉で十分に特徴づけられる。しかし、発展において遂行される新結合は旧結合よりも必然的に有利であるから、そこでは総収入は静態的経済におけるそれよりも大きく、したがってその支出よりも大きい。」³⁵⁾

生産費を構成する項目が、循環的流れにおける静態経済においても、発展過程においても共通であるから、われわれの関心は超過額を説明するのに関わりをもつ“より有利である”という章句に向けられる。シュンペーターが新結合の遂行を詳細に議論しようとしたのは、発展におけるこの点であったといえる。新結合の遂行の場合から引き出される重要な一般的帰結は次のようなものであった。すなわち、新結合が経済的有利さをもたらすために、新結合の各々は、それ自体の方法で、企業者に利潤として流入するような超過額を生み出すということ、これである。新機軸が工程の新機軸の形態をとるかぎり、かかる経済的有利さは生産された商品の生産費の削減による有利さである。シュンペーターは、力織機 (power-loom) のケースを採用しながら、このような新機軸にもとづく超過額の発生を説明している。

「力織機は、その中に含まれた労働用役および土地用役が従来の方法によって——この従来の方法は、生産手段の価格や生産物の価格が不変な場合には、損失なしに生産を可能にする——生産しうるよりも物理的により大きな生産量を生産する。」³⁶⁾

かくして、もし織物がこのような価格で販売され、工程の新機軸にもとづく生産性増大の効果を反映した費用のもとに、企業者によって必要とされる投入量が注入されるならば、そのときそこには超過額が出現することになるであろう。シュンペーターの通常の仮定は、新機軸が導入された後、少くとも暫くのうちは、商品価格が不変のもとにとどまるということである。しかし、新結合の担い手は投入生産費の上昇をある程度まで予想しなければならない。なぜならば、需要効果が起こるからである。順次、新結合の遂行を行う企業者の行動が経済全体に対していかなる影響を及ぼすかを次に具体的な例³⁷⁾によって考察してみることにしたい。

古くさい例であるが、シュンペーターが考えた例にならって、ある綿布の生産者である企業者がこれまで行っていた手労働を減少させるためにアークライト型の力織機を導入して、綿布の生産量一単位当たりの生産費を削減する場合を考えてみよう。まず、静態経済を想定しよう。静態的企業者 (=単なる業主) は労働費用のみで構成される生産費をもって綿布の生産をおこなうとする。この場合、販売価格 = 生産費という均衡状態がもたらされることになる。結果として、静態的企業者の受け取る利潤はゼロとなる。要するに、循環的流れにおいては、静態的企業者は利潤をえなければ、損失もこうむらない。すなわち、彼は企業者そのものとしては存在しないのである。

順次、動態経済に眼を向けよう。いま、綿布の生産者である企業者は力織機を織物機械の生産者から購入すると想定しよう。新機軸の担い手であるこの企業者 (彼は綿布の生産者である) は、この新しい力織機の導入によって一単位労働についてこれまでの6倍の綿布を生産できたとする。このことは労働費用がこれまでの6分の1に節約されることを意味する。しかし、力織機の購入によって力織機の減価償却費という固定費用が発生する。いま、この減価償却費が労働費用の2倍であると想定する。この結果、綿布の生産に必要とされる生産費は、労働費用と減価償却費から構成される。ただし、原材料費を無視する。かくして、動態経済における綿布の生産費は静態経済におけるその半分になる (脚注の表参照)。今、綿布の生産者である企業者がシュンペーターの仮定にもとづいて従来どおりの販売価格をもって新しい綿布の生産物を販売したとすれば、この企業者は価

格と生産費の差額である超過額、すなわち企業者利潤を獲得する。シュンペーターは、その場合、企業者の利潤の全額は、アークライト型の力織機生産の企業者ではなく、その力織機を導入した綿布の生産者にあたえられるであろうと考えている。なぜならば、力織機を生産者は綿布の生産者である企業者の注文通りに力織機を生産すればよく、この場合に彼は特殊な職能を営まないからである。他方、綿布の生産者である企業者は力織機の導入のために資本を調達しなければならない。この企業者はそのための購買力をえるために銀行信用にたよるほかないのであるが、銀行は通貨創造によって発展の金融をおこなうのである。このような付加的な購買力によって一時的な価格騰貴が起こる。生産要素市場において完全競争が支配すると仮定するかぎり、新たに綿布生産者のために他から転用された生産要素の価格は、他の生産要素の価格にひっぱられて、最初は僅かな騰貴を示すにすぎないであろう。発展過程において成功した綿布生産の企業者は新結合の結果としてのプレミアムである利潤を獲得する。この脈絡に関して、シュンペーターは次のように叙述している。

「革新（新結合）は冒険であって、多くの生産者にとっては不可能なものである。しかしもしそれがこの供給地に関して事業を設立し、すべてがうまく運ばば、彼は生産物単位をより安価に生産することができる。しかし従来の価格は始めのうちはそのまま継続する。したがって彼は利潤を獲得する。……この場合、現存の諸要素を新しく結合しただけである。この場合、彼は企業者であり、彼の利得は企業者利潤である。」³⁸⁾（・は筆者付加）

これまでの叙述から明らかになることは、シュンペーターが企業者利潤を経済発展に関連させてのみ把握していたという点である。これに関して、シュンペーターは次のように述べている。

「発展なしには企業者利潤はなく、企業者利潤なしには発展はない。資本主義経済については、企業者利潤なしには財産形成もないということをさらに付け加えなければならない。」³⁹⁾

ところで、動態的企業者が新結合の成功をおさめて多額の利潤を獲得し、これが次々と数を増していく模倣者たちの追従を許すことになると、そしてかりに新機軸が新製品の生産の形態をとる場合についてみると、やがて市場に新製品が氾濫する時期が訪れることになる。生産費の騰貴が起こり、競争メカニズムを介して新製品の価格は次第に下落する。この双方の作用を通じて企業者利潤は徐々に消滅していくであろう。このようにみると、企業者利潤は経済の動態発展における企業者の新結合の報酬として企業者にあたえられるものであり、発展とともに一時的に存在するものであるといえよう。

ところで、シュンペーターは、利潤と利子を同一視するポスト・リカード派の古典派的な見方を否認している⁴⁰⁾。シュンペーターにとって、利子は利潤と同義語ではなく、利潤に賦課される租税である。つまり、利子は企業者によって資本家に対して企業者利潤から振り向けられる支払いである。利子の源泉は利潤である。利潤なくして、利子は存在しない。利子は利潤から回収される。かくして、シュンペーターは以下のような三つの命題を引き出している。

「大きな社会現象としての利子は発展の産物であること、それは企業者利潤から流出すること、ならびにそれは具体的財貨には結びついていないこと、この三つはわれわれの利子理論の基礎である。」⁴¹⁾

上述の議論から明らかにされたように、企業者利潤の一部は、企業者をして新結合の遂行を可能にさせた銀行信用に対して利子として支払われる。この意味において、利子は、銀行によって発展のために特別に創造された購買力の譲渡に対して支払われる価格であり、企業者利潤に対してあたかも租税のように作用するのである。ここで留意すべき点が二つある。ひとつは、利子の源泉となる利潤は、発展の結果生じることから、それは一時的な現象で、決して永続的に存在するという性質のものではないという点である。他のひとつは、利潤の中から支払われる利子は発展の遺産としての貯蓄の供給に与えられるものであり、永続的に存在するという点に関してである。

さて、これまでの議論から明らかにされたように、企業者利潤は費用超過額である。われわれはここでこの超過額 (surplus) のより正確な源泉を明らかにしてみよう。オークレー (A. Oakley) は、著書「シュンペーターの資本主義制モーション理論」の中において、この超過額の源泉問題を取り扱っている。彼の見解に従えば、利潤因子は市場独占力と深いかかわりをもつものとされる。そこでオークレー自身にこの点について語ってもらうことにする。

「ここでさらに付加すべき必要条件がある。すなわち、所得が利潤因子を含むために、企業者は新結合の遂行のお陰によって市場独占力を獲得するにちがいないということ、これである。つまり、企業者はなんらかの意味で競争者である他の生産者よりも、需給条件に関連してある程度の差別的な有利な事情にめぐまれることになる。より高い製品価格を設定することもできるし、より低廉な生産費のもとで製品を生産することによって、企業者は既存の条件のもとで可能となるよりもはるかに生産費を凌駕する大きい収入を増大させることができる。シュンペーターはこの市場独占力について十分に認識していた。」⁴²⁾

この引用文の中に見い出される市場独占力とは、とりも直さず、価格を短期的限界費用の方へ引き下げようとする競争メカニズムの強制力に対抗するためのある種の保護を表すものであろう⁴³⁾。これこそが企業者が新機軸の遂行を成功裡におさめるときに不可欠なものとなる。新機軸とは新しい生産関数の設定である。新機軸は従来から存在している各種の生産要素の組み合わせを変えたり、または新商品を導入したりすることに他ならない。しかし新しいものが費用ないし収入の点でどのような結果をもたらすか、は未定である。もし企業の戦術、すなわち、お互に他人の専門分野には立ち入らないという大企業間の暗黙の協定によって、あるいはまたそこで、一定地域での競争の制限に関する公然の協定によって、新商品ないし新生産過程を導入するための大きな投資に伴う危険が緩和されるならば、新機軸は恐らく一層促進されるであろう。換言すれば、創造的破壊の過程においては、制限的行動はわが乗る舟を堅固にし、当座の困難を緩和させるのに多大の貢献を成しとげうであろう。

ところで、シュンペーターは、大著「経済発展の理論」と大著「景気循環論」において市場独占力の存在と企業者利潤のかかわりについて明らかにしている。彼は「前者」において次のように叙述している。

「企業者利潤と独占利潤との関係について一言しよう。新しい生産物が始めて現われたとき、企業者は競争者をもたないから、その価格形成はまったくあるいはある程度独占価格の原則にしたがう。したがって資本主義経済の企業者利潤には独占の要素がある。」⁴⁴⁾

また、シュンペーターは「後者」においても生産物の差別化を主張することによって新企業の立場を独占競争と類似したものとみなしている。

「体系がその他の点では完全競争体系であったとしても、われわれの意味での革新企業はほとんど必然的に『不完全な』状況にあるという他の事実を負うということはすぐにわかる。このことはなぜにわれわれが発展と競争の不完全との関係をあれほど頑固に強調するかということの理由の一つである。この結果、このかぎりでは利潤もまた準独占利得の範疇にふくまれるということになる。」⁴⁵⁾

要するに、シュンペーターにとって、企業者利潤とは市場独占力から引き出される所得に他ならない。しかしながら、企業者の新結合の行動にもとづく企業者利潤は、やがては競争と適応の過程のうちに消失していく一時的所得でもある。対照的に、静態的独占企業者の獲得する独占利潤は恒久的所得である。また、英雄的企業者の新結合の行動が独占的地位にある場合には、英雄的企業者の機能と独占的企業者の機能、新結合の遂行による企業者利潤と独占利潤とは一見識別しがたいもののように思われる。しかしシュンペーターはこの場合においてさえも厳密に識別すべきものとし

ていたのである。さらに、英雄的企業者の新結合の行動による企業者利潤は、企業者が新しい生産関数を設定し、それを実行にうつすことによって、積極的に獲得する動態的所得である。それは、独占企業が独占企業なるがゆえに獲得する独占利潤とは異なる種類の利潤である⁴⁶⁾。

5 結びに代えて

本稿において、シュンペーターの経済発展過程のさまざまな側面が論究された。本稿における分析の内容を要約すれば、次の如くである。

(1) 経済発展が静態経済の中に新結合を導入することによって説明されるという考えは、以下のようなイシューを提示する。すなわち、第一に、いかなる経済主体が新結合の応用を組織化するのか。第二に、新結合の遂行のために使用される資源をどのように獲得されるのか。第三に、新結合の遂行のために必要とされる金融の源泉はなにか。

(2) シュンペーターの見解によれば、経済発展の中心現象は、企業者、新結合の遂行、銀行による信用創造の三者である。企業者とは、新設備、新工場を建設することによって、既存の生産能力に新次元を付加する担い手である。

(3) 企業者が必要とする資源は、企業者の需要に反応する市場誘発の再配分によって、既存の資源から引き抜かれる。このことによって、シュンペーターは経済発展と資源ベースにもとづく成長とを分割した。

(4) 静態経済において先き立つ貯蓄の能力が存在しない場合、新結合遂行のための典型的な金融の源泉は「銀行による信用創造」である。

(5) 資源を高い生産性の分野にシフトさせたり、高性能の製品を開発することによって、既存の生産者を凌駕する生産費の削減や価格の有利さを造出する企業者能力が、企業者利潤を生み出すことになる。このような企業者利潤の寿命は一時的なものである。かかる寿命は、他の企業者に対する企業者の経済的有利さを浸食していく新機軸の普及率によって決定される。

注

- 1) März [17] pp. 31-33.
- 2) Schumpeter [15] p. 175.
- 3) Schumpeter [15] p. 173.
- 4) Schumpeter [15] p. 213.
- 5) Schumpeter [15] pp. 178-179.
- 6) Schumpeter [15] p. 182.
- 7) Schumpeter [15] pp. 182-183. Oakley [18] pp. 97-99.
- 8) 伊達 [1] pp. 83-86.
- 9) Schumpeter [15] pp. 208-209.
- 10) Oakley [18] pp. 104-107.
- 11) Schumpeter [15] p. 185.
- 12) Schumpeter [15] p. 185.
- 13) Schumpeter [15] pp. 188-189.
- 14) Schumpeter [15] p. 186.
- 15) Schumpeter [15] p. 194.
- 16) Schumpeter [15] p. 196.
- 17) Schumpeter [19] pp. 1166-1171. 金指 [3] pp. 28-30.
- 18) Walras [20] pp. 301-302.
- 19) Marshall [21] pp. 283-284.

- 20) 池本 [5] pp. 83-84.
- 21) Schumpeter [15] pp. 198-199.
- 22) 塩野谷 [13] p. 207.
- 23) 青木 [7] pp. 168-179.
- 24) Drucker [11] p. 43.
- 25) 河野 [22] p. 15.
- 26) Schumpeter [15] pp. 210-211.
- 27) Schumpeter [15] pp. 222-228.
- 28) 伊達 [1] p. 95.
- 29) 塩野谷 [13] p. 205.
- 30) Schumpeter [15] p. 238.
- 31) Oakley [18] p. 115.
- 32) Schumpeter [15] p. 240.
- 33) Schumpeter [15] p. 244.
- 34) Schumpeter [23] p. 9.
- 35) Schumpeter [23] p. 10.
- 36) Schumpeter [23] p. 14.
- 37) 速水 [6] pp. 357-360.

表1 企業者利潤発生の数値例

	労働費用	減価償却費	生産費	販売価格	総収入 (= 販売価格 × 数量)	企業者利潤
静態経済	600	0	600	600	600 (= 600 × 1)	0
動態経済	100	200	300	600	600 (= 600 × 1)	300

(注) 議論を単純化するために、原材料費を除く。

- 38) Schumpeter [23] p. 19.
- 39) Schumpeter [23] p. 53.
- 40) Conard [24] p. 91.
- 41) Schumpeter [23] p. 95.
- 42) Oakley [18] p. 138.
- 43) Harris [16] p. 250.
- 44) Schumpeter [23] p. 50.
- 45) Schumpeter [14] p. 156.
- 46) 吉田 [9] pp. 10-11.

参 考 文 献

- [1] 伊達邦春 「シュンペーター」 「日本経済新聞社」 昭和54年。
- [2] 伊達邦春 「シュンペーターの経済学」 「創文社」、1991。
- [3] 金指 基 「シュムペーターの経済発展理論と企業者」 「商学集志」 第43巻第3号、日本大学商学研究会、1974。
- [4] 金指 基 「シュムペーターの経済発展理論と信用創造理論」 「商学集志」 日本大学商学研究会、1973。
- [5] 池本正純 「マーシャルの企業者像」 「専修経営学論集」 第32号、専修大学学会、1981。
- [6] 速水 保 「シュンペーターとケインズの利潤概念の比較」 「一橋論叢」 第53巻第3号、一橋大学経済学会、1965。
- [7] 青木泰樹 「シュンペーター理論の展開構造」 御茶の水書房、1987。

- [8] 吉田昇三 「シュムペーターの経済学」法律文化社、1964.
- [9] 吉田昇三 「シュムペーター体系と独占」『季刊理論経済学』第8巻第1、2号、東洋経済新聞社、1957.
- [10] 北条勇作 「シュンペーター経済学の研究」多賀出版、1991.
- [11] P.F. Drucker, "Innovation and Entrepreneurship", Harper & Row, Publishers, 1985 (小林宏治訳、「イノベーションと企業家精神」ダイヤモンド社、昭和60年)。
- [12] 青沼吉松 「企業者精神と経営者資本主義」『三田学会雑誌』第76巻第6号、慶応義塾経済学会、1984.
- [13] 塩野谷祐一 「シュンペーター的思考」東洋経済新聞社、1995.
- [14] J.A. Schumpeter, "Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process," McGraw-Hill Book Company 1939 (吉田昇三監修金融経済研究会訳、「シュムペーター景気循環論 I」有斐閣、昭和33年)。
- [15] J.A. Schumpeter, "Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung," Duncker & Humblot, 1926 (塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳「経済発展の理論 (上)」岩波書店、1977)。
- [16] S.E. Harris, "Schumpeter, Social Scientist", Harvard University Press, 1951 (坂本二郎訳、「社会科学者シュムペーター」東洋経済新報社、昭和30年)。
- [17] E. März, "J. Schumpeter", Yale University press, 1991.
- [18] A. Oakley, "Schumpeter's Theory of Capitalist Motion", Edward Elger, 1990.
- [19] J.A. Schumpeter, "History of Economic Analysis," George Allen & Unwin Ltd 1954 (東畑精一訳「シュムペーター経済分析の歴史3」岩波書店、1971)。
- [20] L. Walras, "Eléments d' économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale," Paris et Lausanne, 1926 (手塚寿郎訳「純粹経済学要論 (上)」岩波書店、1933)。
- [21] A. Marshall, "Principles of Economics," Macmillan, 1930 (馬場啓之助訳、「マーシャル経済学原理 II」東洋経済新報社、昭和60年)。
- [22] 河野善隆 「シュンペーターの革新概念の変化」『商英論叢』1974.
- [23] J.A. Schumpeter, "Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung," Duncker & Humblot, 1926 (塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳「経済発展の理論 (下)」岩波書店、1977)。
- [24] J.W. Conard, "An Introduction to the Theory of Interest." University of California Press, 1963.
(平成8年6月18日 受理)